

重地則據。圯地則行。圍地則謀。死地則戰。
 所謂古之善用兵者、能使敵人前後不相
 及、衆寡不相恃、貴賤不相救、上下不相
 收、卒離而不集、兵合而不齊。合於利
 而動、不令於利而止。敢問、敵衆整而
 將來、待之若何。曰、先奪其所愛則聽
 矣。兵之情主速。乘人之不及、由不
 虞之道、攻其所不戒也。
 凡爲客之道、深入則專、主人不克。掠於
 饒野、三軍足食、謹養而勿勞、併氣積力、
 運兵計謀、爲不可測、投之無所往、
 死且不北。死焉不得。士人盡力。兵士
 其陷則不懼、無所往則固、入深則拘、

かれ。争地には則ち攻むるなかれ。交地には則ち絶るること
 なかれ。衝地には則ち交を合せよ。重地には則ち據めよ。圯
 地には則ち行け。圍地には則ち謀れ。死地には則ち戦へ。
 謂はゆる古の善く兵を用ふる者は、能く敵人をして、前後相
 及ばず、衆寡相持ます、貴賤相救はず、上下相收めず、卒離
 れて集まらず、兵合して齊はざらしむ。利に合して而して動
 き、利に合せずして而して止む。敢て問ふ、敵衆整にして將
 に來らんとする、之を待つこと若何。曰く、先づ其の愛する
 所を奪はば則ち聽かん。兵の情は速を主とす。人の及ばざる
 に乘じ、虞らざるの道に由り其の戒めざる所を攻むるなり。
 凡そ客たるの道、深く入れば則ち專らにして、主人克たず。
 饒野に掠めて三軍食を足し、謹み養うて勞することなく、
 氣を併せ力を積み、兵を運して計謀し、測るべからざること
 を爲し、之を往く所なきに投すれば、死すとも且つ北けじ。
 死焉んぞ得ざらん。士人力を盡す。兵士甚だしく陥れば則ち

不得已則圍。是故、其兵不修而戒、不
 求而得、不約而親、不令而信。禁祥去
 疑、至死無所之。吾士無餘財、非惡
 貨也。無餘命、非惡壽也。令發之日、士
 卒坐者涕沾襟、偃臥者涕交頤。投之無
 所往、則諸劔之勇也。

故善用兵者、譬如率然。率然者常山之蛇
 也。擊其首則尾至、擊其尾則首至、
 擊其中則首尾俱至。敢問、兵可使如
 率然乎。曰可。夫吳人與越人相惡也。
 當其同舟而濟、遇風、其相救也如左右
 手。是故、方馬埋輪、未足恃也。齊勇
 若一、政之道也。剛柔皆得、地之理也。

懼れず、往く所なければ則ち固く、入ること深ければ則ち
 拘し、已むことを得ざれば則ち圍ふ。是故に、其の兵修めず
 して而も戒め、求めずして而も得、約せずして而も親み、令
 せずして而も信あり。祥を禁じ疑を去り、死に至るまで之く
 所なし。吾が士餘財なきは、貨を惡むに非ざるなり。餘命な
 きは、壽を惡むに非ざるなり。令、發するの日、士卒坐する
 者は涕襟を沾し、偃臥する者は涕頤に交はる。之を往く所な
 きに投すれば、則ち諸劔の勇なり。
 故に善く兵を用ふる者は、譬へば率然の如し。率然とは常山
 の蛇なり。其の首を撃てば則ち尾至り、其の尾を撃てば則ち
 首至り、其の中を撃てば則ち首尾俱に至る。敢て問ふ、兵率
 然の如くならしむべきか。曰く可なり。夫れ吳人と越人とは
 相惡めり。其の、舟を同じうして濟り、風に遇ふに當りて、
 其の相救ふや左右の手の如し。是故に、馬を方べ輪を埋むる
 も未だ恃むに足らざるなり。勇を齊へて一の若くするは、政

故善用兵者、携手若使一人、不得已也。將軍之事、靜以幽、正以治。能愚士卒之耳目、使之無知、易其事、革其謀、使人無識、易其居、迂其途、使人不得慮、帥與之期、如登高而去其梯、帥與之深入諸侯之地、而發其機、焚舟破釜、若驅群羊、驅而往、驅而來、莫知所之。聚三軍之衆、投之於險、此將軍之事也。九地之變、屈伸之利、人情之理、不可不察也。凡爲客之道、深則專、淺則散。去國越境而師者絕地也。四達者衝地也。入深者重

の道なり。剛柔皆得るは、地の理なり。故に善く兵を用ふる者、手を携ふること一人を使ふが若くなるは、己むことを得ざればなり。將軍の事は、靜以て幽、正以て治。能く士卒の耳目を愚にし、之をして知ることなからしめ、其の事を易へ、其の謀を革め、人をして識ることなからしめ、其の居を易へ、其の途を迂にし、人をして慮ることを得ざらしめ、帥るて之と期すれば、高きに登りて其の梯を去るが如し。帥るて之と深く諸侯の地に入り、而して其の機を發し、舟を焚き釜を破れば、群羊を驅るがごとし。驅られて往き、驅られて來るも、之く所を知ることなし。三軍の衆を聚めて、之を險に投ずるは、此れ將軍の事なり。九地の變、屈伸の利、人情の理、察せざるべからざるなり。凡そ客たるの道は、深ければ則ち專に、淺ければ則ち散す。國を去り境を越えて帥するものは絶地なり。四達するものは

地也。入淺者輕地也。背固前隘者圍地也。無所往者死地也。是故、散地、吾將一其志。輕地、吾將使之屬。爭地則吾將趨其後。交地吾將謹其守。衝地吾將固其結。重地吾將繼其食。圯地、吾將進其途。圍地、吾將塞其闕。死地、吾將示之以不活。故兵之情、圍則禦、不得已則鬪、過則從。是故、不知諸侯之謀者、不能預交。不知山林險阻沮澤之形者、不能行軍。不用鄉導者、不能得地利。四五者、不知一、非霸王之兵也。

衝地なり。入ること深きものは重地なり。入ること淺きものは輕地なり。固を背にし隘を前にするものは圍地なり。往く所なきものは死地なり。是故に、散地には、吾將に其の志を一にせんとす。輕地には、吾將に之をして屬せしめんとす。爭地には則ち吾將に其の後に趨かんとす。交地には、吾將に其の守を謹まんとす。衝地には、吾將に其結を固めんとす。重地には、吾將に其の食を繼がんとす。圯地には、吾將に其の途を進めんとす。圍地には、吾將に其の闕を塞がんとす。死地には、吾將に之に示すに活きざるを以てせんとす。故に兵の情、圍まるれば則ち禦ぎ、己むことを得ざれば則ち鬪ひ、過ぐれば則ち從ふ。是故に諸侯の謀を知らざる者は、預め交はること能はず。山林險阻沮澤の形を知らざる者は、軍を行ること能はず。鄉導を用ひざる者は、地の利を得ること能はず。四五のもの、一をだに知らざれば、霸王の兵に非ざるなり。

夫霸王之兵、伐大國、則其衆不得聚。威加於敵、則其交不得合。是故、不爭天下之交、不養天下之權。信己之私、威加於敵。故其城可拔、其國可隳。施無法之賞、懸無政之令、犯三軍之衆、若使一人。犯之以事、勿告以言。犯之以利、勿告以害。投之亡地、然後存、陷之死地、然後生。夫衆陷於害、然後能爲勝敗。

故爲兵之事、在順詳敵之意。并力一向、千里殺將。是謂巧能成事。是故、政舉之日、夷關折符、無通其使。勦於廊廟之上、以誅其事。敵人開闔、必亟入之。先其所愛、微與之期。踐墨隨敵、以決

夫れ霸王の兵、大國を伐てば、則ち其の衆聚まるを得ず。威、敵に加はれば、則ち其の交、合ふことを得ず。是故に、天下の交を争はず、天下の權を養はず。己の私を信じて、威、敵に加はる。故に其の城拔くべく、其の國隳るべし。無法の賞を施し、無政の令を懸け、三軍の衆を犯ふること、一人を使ふがごとし。之を犯ふるに事を以てし、告ぐるに言を以てすること勿れ。之を犯ふるに利を以てし、告ぐるに害を以てすること勿れ。之を亡地に投じて然る後に存し、之を死地に陥れて然る後に生く。夫れ衆、害に陥りて、然る後に能く勝敗を爲す。

故に兵の事を爲すは、敵の意を順詳するに在り。力を并せて一向し、千里、將を殺す。是を、巧にして能く事を成すといふ。是故に、政舉の日、關を夷り、符を折り、其の使を通ずることなからしむ。廊廟の上に勦まして、以て其の事を誅む。敵人開闔せば、必ず亟かに之に入れ。其の愛する所を先にし

戰事。是故、始如處女、敵人開闔。後如脫鬼、敵不及拒。

火攻第十二

孫子曰、凡火攻有五。一曰火人、二曰火積、三曰火庫、四曰火庫、五曰火隊。行火必有因。煙火必素具。發火有時、起火有日。時者天之燥也。日者月在箕、壁、裏、趁也。凡此四宿者、風起之日也。凡火攻、必因五火之變而應之。火發於內、則早應之於外。火發兵靜者、待而勿攻。極其火力、可從而從之、不可從而止。火可發於外、無待於內、以時發之。

して、微に之と期す。墨を踐み敵に隨ひ、以て戰の事を決す。是故に始は處女の如し、敵人、闔を開く。後には脱鬼の如し、敵、拒ぐに及ばず。

孫子曰く、凡そ火攻に五あり。一に曰く人を火く、二に曰く積を火く、三に曰く輜を火く、四に曰く庫を火く、五に曰く隊を火く。火を行ふには必ず因あり。煙火必ず素より具ふ。火を發すること時あり、火を起すこと日あり。時とは天の燥けるなり。日とは月箕・壁・裏・趁に在るなり。凡そ此の四宿は、風起るの日なり。凡そ火攻は、必ず五火の變に因りて之に應ず。火、内に發すれば、則ち早く之に外に應ず。火發して兵靜かなるものは、待ちて攻むること勿れ。其の火力を極め、從ふべければ之に従ひ、從ふべからざれば止む。火外に發すべくんば、内に待

火發上風、無攻下風。晝風久、夜風止。凡軍必知五火之變、以數守之。故、以火佐攻者明。以水佐攻者強。水可以絕、不可以奪。夫戰勝攻取、而不修其功者凶。命曰費留。故曰、明主慮之、良將修之。非利不動、非得不用、非危不戰。主不可以怒而興師、將不可以愠致戰。合於利而動、不合於利而止。怒可以復喜、愠可以復悅。亡國不可以復存。死者不可以復生。故明君慎之、良將警之。此安國全軍之道也。

火發上風、無攻下風。晝風久、夜風止。凡軍必知五火之變、以數守之。故、以火佐攻者明。以水佐攻者強。水可以絕、不可以奪。夫戰勝攻取、而不修其功者凶。命曰費留。故曰、明主慮之、良將修之。非利不動、非得不用、非危不戰。主不可以怒而興師、將不可以愠致戰。合於利而動、不合於利而止。怒可以復喜、愠可以復悅。亡國不可以復存。死者不可以復生。故明君慎之、良將警之。此安國全軍之道也。

つことなく、時を以て之を發せよ。火上風に發せば、下風を攻むること無れ。晝の風は久しく、夜の風は止む。凡そ軍は、必ず五火の變を知りて、數を以て之を守る。故に、火を以て攻を佐くる者は明。水を以て攻を佐くる者は強。水は以て絶つべく、以て奪ふべからず。夫れ戰ひて勝ら、攻めて取り、而も其の功を修めざる者は凶なり。命じて費留といふ。故に曰く、明主は之を慮り、良將は之を修む。利に非ざれば動かす、得に非ざれば用ひず、危きに非ざれば戰はず。主は怒を以て師を興すべからず。將は愠を以て戰を致すべからず。利に合ひて動き、利に合はずして止む。怒は以て復た喜ぶべし、愠は以て復た悦ぶべし。亡國は以て復た存すべからず。死者は以て復た生くべからず。故に明君は之を慎み、良將は之を警む。此れ國を安んじ軍を全うするの道なり。

用間第十三

孫子曰、凡興師十萬、出征千里、百姓之費、公家之奉、日費千金、內外騷動、怠於道路、不得操事者七十萬家、相守數年、以爭一日之勝。而愛爵祿百金、不知敵之情者、不仁之至也。非人之將也、非主之佐也、非勝之主也。故明君、賢將、所以動而勝人、成功出於衆者、先知也。先知者、不可取於鬼神、不可象於事、不可驗於度。必取於人、知敵之情者也。故用間有五。有鄉間、有內間、有反間、有生間、有五間俱起、莫知其道、是謂神紀。人君之寶也。鄉間者、因其鄉人而用之、內間者、因其官人而用之。

孫子曰く、凡そ師を興すこと十萬、出でて千里に征せば、百姓の費、公家の奉、日に千金を費し、内外騷動し、道路に怠り、事を操るを得ざるもの七十萬家、相守ること數年、以て一日の勝を争ふ。而るに爵祿百金を愛み、敵の情を知らざる者は不仁の至なり、人の將に非ざるなり、主の佐に非ざるなり、勝の主に非ざるなり、故に明君賢將、動きて人に勝ち、成功衆に出づる所以のものは、先づ知ればなり。先知なるものは、鬼神に取るべからず、事に象るべからず、度に驗すべからず。必ず人に取りて敵の情を知るものなり。故に間を用ふるに五あり。郷間あり、内間あり、反間あり、死間あり、生間あり、五間俱に起りて其の道を知ることなき、是を神紀といふ。人君の寶なり。郷間なるものは、其の郷人に因りて之を用ひ、内間なるものは、其の官人に因りて之を

之。反間者、因其敵間、而用之。死間者、爲誑事於外、令吾間知之、而傳於敵間也。生間者、反報也。故三軍之事、親、莫親於間。賞、莫厚於間、事、莫密於間。非聖智、不能用間。非仁義、不能使間。非微妙、不能得間之實。微哉微哉、無所不用間也。間事未發而先聞者、間與所告者、皆死。

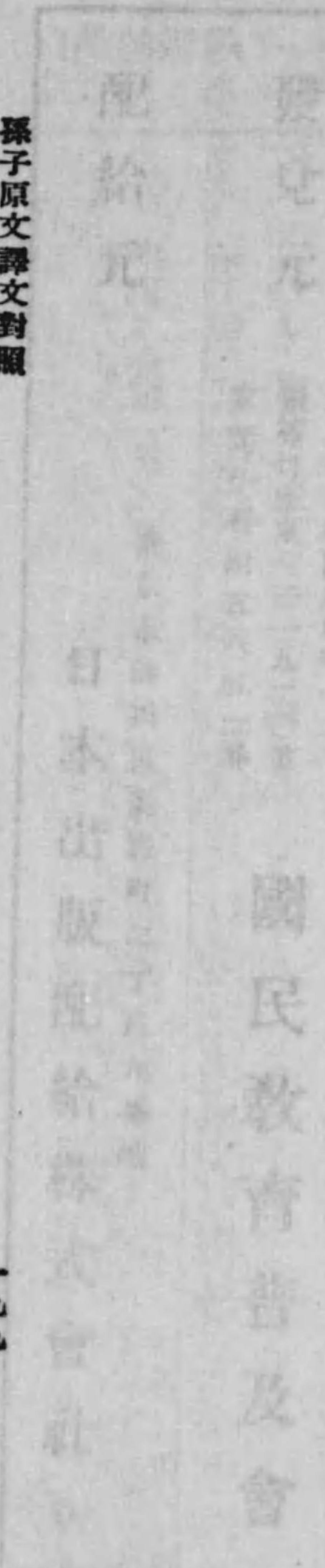
凡軍之所欲擊、城之所欲攻、人之所欲殺、必先知其守將、左右、諷者、門者、舍人之姓名、令吾間必索知之。必索敵間之來間我者、因而利之、導而舍之。故反間可_レ得而用也。因_レ是而知之。故鄉間、內間可_レ得而使也。因_レ是而知之。故死間

用ひ、反間なるものは、其の敵間に因りて之を用ふ。死間なものは、誑事を外に爲し、吾が間をして之を知りて敵の間に傳へしむるなり。生間なるものは、反り報するなり。故に三軍の事、親しきこと間より親しきはなし。賞は間より厚きはなし。事は間より密なるはなし。聖智に非ざれば間を用ふることは能はず。仁義に非ざれば間を使ふこと能はず。微妙に非ざれば間の實を得ること能はず。微なるかな、微なるかな、間を用ひざる所なし。間の事、未だ發せずして先づ聞く者あらば、間と告ぐる所の者と皆死す。

凡そ軍の撃たんと欲する所、城の攻めんと欲する所、人の殺さんと欲する所、必ず先づ其の守將・左右・諷者・門者・舍人の姓名を知り、吾が間をして必ず之を索知せしむ。必ず敵間の來りて我を問する者を索め、因て之を利し、導いて之を舍す。故に反間得て用ふべきなり。是に因て之を知る。故に郷間・內間得て使ふべきなり。是に因て之を知る。故に死間誑事を

爲誑事、可使告敵。因是而知之。故生間可_レ使如期。五間之事、主必知之。知之必在於反間。故反間不可_レ不厚也。昔殷之興也、伊摯在夏。周之興也、呂牙在殷。故惟明君賢將、能以上智爲間者、必成大功。此兵之要、三軍之所恃而動也。

爲して敵に告げしむべし。是に因て之を知る。故に生間期の如くならしむべし。五間の事、主必ず之を知る。之を知るは必ず反間に在り。故に反間は厚くせざるべからざるなり。昔、殷の興るや、伊摯夏に在り。周の興るや、呂牙殷に在り。故に惟明君賢將のみ能く上智を以て間者と爲し、必ず大功を成す。此れ兵の要、三軍の恃んで動く所なり。



白熱的歡迎を受ける
本會優良圖書介紹欄

石川七五三二著

兒童の心理と家庭教育講話

平易に趣味を深く記述され愛兒の教育指針を示されたる書なり

目次大要

家庭教育に就て両親に望む……生れつき……育ち……乳幼兒の心理と家庭教育
 幼兒の言葉……幼兒のお話……幼兒の一般的特点と家庭教育……學童の特色と家庭教育
 幼兒の情緒と本能……幼兒の興味と理想……智能の新しい見方
 學習と指導氣質と性格……異常兒の心理と家庭教育
 將來の方針の決め方……

元陸軍教授 友田宜剛謹著

詔勅の謹解と日本精神

陸軍省・海軍省推奨圖書

宮内省 陸軍省 海軍省 下賜寫真二十數枚挿入

四六判 箱入
 總頁數五十七頁
 皮革紙印刷
 定價二圓七十錢

◎本書は元陸軍教授として多年將校教育に盡瘁せられたる友田先生が約一ケ年の日子に渡り渾身の心身を濺いで、現在までの大詔勅廿七篇につき聖旨の存する所を平明に謹解し且つ大意、語釋、通解及感想の三項に分ち更に參考事項を掲げ以つて聖旨の體得に資せる卓越せる書なり。

四六判 箱入
 總頁數三十二頁
 皮革紙印刷
 定價一圓八十錢

415
496

oil